

# 幼児の 母



昭和十五年

九月

## 母の勤勞

「お母さんは何してゐらつしやる」「御用してゐらつしやる」之れが子どもの答へです。

この答へは、たゞありのまゝを答へたといふ以上に、子どもとして思ひ出す我が家の母の一番親しみ深い姿でもあるのです。これ以外の答へを想像してみると「寝んねしてゐます」「悲しいですね」「遊んでゐます」「子ども心にもたよりないでせうね」「思索してゐられます」「子どもには分りにくいですね」「御用」なんといふいゝ言葉でせう、そこには一種の有り難さの感じを伴はずにゐな

いのです。

その御用の内容は、坊や達の着物のお仕事でせう。お洗濯でせう。臺所でのお仕度でせう。必ずしも公儀の御用ではないでせう。町會のこと、隣組のことがあるとして、それも家事の間のことです。子どもが、感心するともなく感心し、感謝するともなく感謝してゐる、そして、だから眞に家のお母さんらしい氣のするのは、家のことに働いてゐる母です。母の勤勞はたゞ實用だけのことではありません。家庭教育の中必なのです。

## 母のこよみ 幼稚園に馴れる子

この四月に始めて入園されたお子さんの爲に、初めての夏休みが済んで、第二保育期に入りました。相當長いお休みでしたし、なかには幼稚園を待ちくたびれたお子さんもある位でせう。少くも、お休みの間、何彼につけて幼稚園のことを想つたでせう。お友達のことを、先生のことを、お庭のことを、お部屋のことを。そして、毎日登園してゐる時よりも却つて懐しい氣持が起つたこととせう。懐しいといふ迄でもないとして、その間に、幼稚園が我がものとして、じつくりと心の中に溶けもし、浸透もしたことを言つていゝでせうか。その證據に、第二保育期の子どもの、なんと急に元氣なこととせう。前には引込勝ちの子がなんと活躍することとせう。つまり幼稚園生活が自分のものになつたのですね。